

# びわこの 考湖学

1

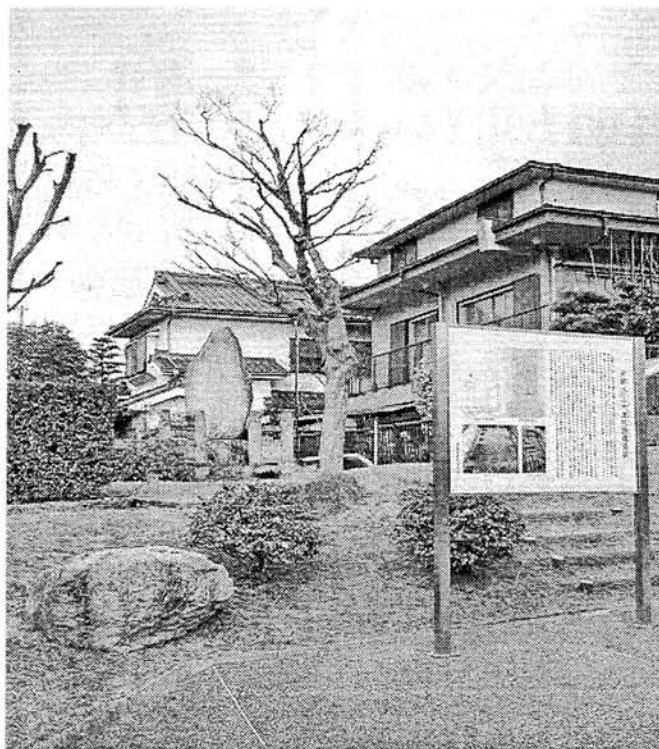
古代屈指の政変である乙巳の変(大化の改新)の後、唐・新羅連合軍によって滅ぼされました。当時の政府首班であった中大兄皇子(後の天智天皇)は、百濟復興を支援するために朝鮮半島へと出兵しました。しかし、663年の白村江の戦いにおいて、倭・百濟連合軍は唐・新羅連合軍に惨敗し、対外的な脅威を抱えることになったのです。

北部九州から近畿にかけての瀬戸内海沿岸に多数の山城を築くなど、国防を充実させる中で、667年3月に飛鳥から大津へと宮を遷し、中大兄皇子は即位して天智天皇となります。ただ、この遷都の理由は諸説あり、明らかではありません。

飛鳥であり大津であったの移すところもろんだ場所が、7世紀になると飛鳥、難波、大津に宮が置かれていた共通要素があることに気づきます。あまり広く知られていませんが、天智天皇が大津から、さらに宮を

しかし、宮の周辺においては幾つかの場所に分かれて行われてきた考古学的調査

## 大津遷都



大津宮跡。現在は住宅や公園になっている  
＝大津市錦織

飛鳥であり大津であったの移すところもろんだ場所が、7世紀になると飛鳥、難波、大津に宮が置かれていた共通要素があることに気づきます。あまり広く知られていませんが、天智天皇が大津から、さらに宮を

日本列島に住まいながらも、完全に同化するのではなく、特長を生かして列島と半島の架け橋的な役割を担っていたのです。

また、彼ら渡来系集団は文字の使用にたけており、当時日本列島では知れない知識や技術を持っていたことも知られています。

激動の7世紀、中大兄皇子は海外事情通でもある渡来系集団と密接な関係をもっていたことは、想像に難くありません。大津への遷都は、このような事情を背景にしていたのです。



大津宮 白村江での敗戦後、中大兄皇子が667年に飛鳥から遷した宮。中大兄皇子は大津宮で即位し、天智天皇となる。671年に天智天皇が没し、翌年の壬申の乱で天智天皇の後継者・大友皇子が大海人皇子(後の天武天皇)に敗れ、再び飛鳥に遷都。近江大津宮は廃された。

なぜ渡来系集団が琵琶湖

のほとり、大津に居住していたかについては、次回以降に明らかにしていく予定です。

(滋賀県文化財保護協会 畑中英二)

# 渡来人あるところ宮都あり